日高市小瀬名の「殉職之地」を訪ねる

小瀬名の殉職の碑紹介

小瀬名は標高370m、日和田山305m、物見山375mの中間の高さです。細川友一氏の著書「碑　－短編小説集－」によりますと、昭和19年5月27日、横田飛行場より飛来した双発の飛行機が小瀬名の耕作地に墜落、乗員4名が即死したため、陸軍が殉死として地元に慰霊碑を建てるよう要請、それにこたえて杉田源吉さんら地元住民が4名の名前と階級を記した石碑を建てました。

横田基地は当時、陸軍多摩飛行場と呼ばれ、横田基地と命名したのは日本に進駐した米軍です。日和田山から奥に延びる奥武蔵の稜線上は、現在に至るまで実に多くの飛行機が墜落しました。豊岡航空士官学校（米軍ジョンソン基地）、東京多摩飛行場（米軍横田基地）等がありました。多摩飛行場は試作機のテストを専門に行っていた関係だと思いますが、地元に聞き取りすると驚くほど話しが出てくるそうです。

小瀬名周辺の案内

物見山。見晴らしの良い場所にベンチが並んでいます。ベンチの奥の細い道を少し行くと、一等三角点の埋まる物見山山頂。標識の北向地蔵方面へ向かいます。東屋を過ぎて、気持ちの良い道を行きます。左から並走する山道と接触。このまま進むと北向地蔵へ。左の道に入り、少し行くと馬頭観音の石碑。民家が見えてきて、小瀬名の集落。菜の花、ツツジ、他の花々が綺麗な、山間ののどかな山村です。集落を過ぎて下っていくと、舗装された車道に出ます。車道を少し行くと、北向地蔵からの道と合流。沢沿いの道になり、左に「五常の滝」の標識。谷へ下ると、五常の滝。

今、なぜ小瀬名の殉職の地を訪ねるのか

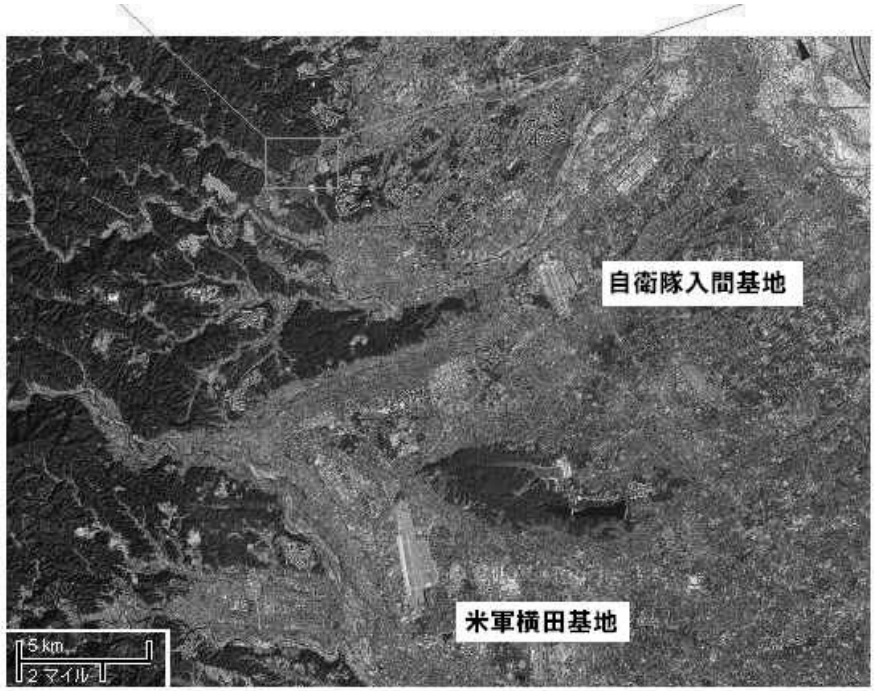
現在、沖縄をはじめ全国で米軍基地の撤去を求める声が高まっています。戦争の基地が自分の家のそばにあるのは誰でもいやです。しかし、私たち日高市の近くにも自衛隊入間基地や米軍横田基地が置かれ、この日高市の上を米軍機や自衛隊機が飛び回っています。1999年11月22日に自衛隊の練習用ジェット機T33が入間川河川敷に墜落炎上、搭乗員2名の命が失われました。この事故で河川敷をまたぐ東京電力の高圧送電線が切断され、大きな被害が出ました。このような墜落事故は跡を絶たず、私たちの生活を脅かしています。

よくよく調べてみますと、基地はどれも国民の土地を取り上げて作られたもので、軍事目的の遂行のためには私たち国民をたいへん苦しめられてきました。小瀬名に墜落した軍用機も入間に墜落した飛行機と同様、危険なものには変わりがありません。特に、戦争中は平和なとき以上に人命が軽視されました。今回のフィールドワークを通じて、あらためて基地の危険性や戦争の愚かさを考えましょう。

小瀬名と米軍横田基地、自衛隊入間基地の位置関係は下図のようになっています。横田基地と小瀬名の間は約 16kmで、飯能市と横田基地の間は約12kmです。戦前、日高には陸軍航空士官学校高萩分教場がありました。もともとは開拓地だったのですが、軍が強制収用して入間にある航空士官学校の分校として使用しました。ユングマンなどドイツ製の複葉機をモデルにした練習機が使われました。

最寄り駅には現在の武蔵高萩駅が昭和15年に開設、川越と高麗川を結びました（現在の川越線）。武蔵高萩駅には貴賓室が設けられ、防空壕も作られました。そこから入間までは舗装され、それが現在の407号線で

す。



昭和20年7月28日、米軍艦載機が同飛行場や高麗川駅を空襲、死者やけが人が出ています。高萩の分教場は戦後米軍が接収、しばらくしてから食料増産を目的に県から民間に払い下げられました。現在の日高市旭ヶ丘です。

ハイキング途中、米軍横田基地から飛び立った戦闘機や輸送機が武蔵丘陵を越えて頭の上を悠々と横切っていくのが見えます。ジェット戦闘機は日和田山や物見山をめがけて突っ込んできます。その真下は日高市清流地区で、山に向かう道路沿いには民家が散在しています。

短編小説「碑」では飛行機は双発で、機体の色は「銀色」と描写されていました。墜落した飛行機の機種名は書かれていません。乗員4名で多摩飛行場から飛んできた、と書かれているのでキー67（四式重爆撃）の改造型ではないかと推定しています。多摩飛行場には陸軍航空審査部が置かれ、陸軍が使用する航空機のテストが行われていました。航空審査部の最寄駅は当時の地名である東京府西多摩　郡福生町の駅。航空審査部は「航空隊のそれぞれのトップがいて、これからどんな飛行機を製作するか研究し、試作し、更に試作機のテストを繰り返し、その飛行機を　陸軍で正式に採用するか否かを決定する所」として存在しました。多摩飛行場の近くには陸軍立川飛行場があり、当時は陸軍航空の研究・開発・製造の一大拠点として重要な地位を占めていました。周辺には軍用機を製作する立川飛行機、日立航空機、昭和飛行機工業など多くの工場が建てられていました。

渡辺洋二著「陸軍実験戦闘　機隊」グリーンアロー出版、1996年6月発行は、航空ファン1996－9～1998－11まで連載された原稿をまとめ、加筆修正されたものです。序文によると、航空審査部の任務上「なにも起こらないケースは奇跡でしかない」こと、「あらゆる審査飛行に付きまとう　のは負傷と死だ」、扱う対象は「未知だらけの飛行機」と書かれています。同書は航空審査部飛行実験隊戦闘班、もしくは同部戦闘隊の様子を描いており、機種ごとに時系列で記述しています。小瀬名に墜落した機体については記述を追ったが発見できませんでした。同書によれば戦闘用の双発機（例キ45改Ⅱ型）は複座式（乗員2名）とのこと、石碑にある4名は搭乗不可であろう。　石碑にある「雇員」について記述があり、雇員は下士官待遇で技術者であったことが分かりました。　墜落事故は軍事機密であるので報道されなかった可能性が高いのです。それとは逆に国民の士気高揚を目的と

した記事が掲載され、国民は事実をすべて知ることはできなかったのです。

米軍横田基地とは

福生市の HP によりますと、米空軍、横田基地は福生市・立川市・昭島 市・武蔵村山市・羽村市・瑞穂町の 5 市 1 町にまたがり所在する本土（沖縄県を除く）では最大の米空軍基地であるとともに、在日米軍司令部及び第5空軍司令 部がおかれている極東における主要基地であり輸送中継基地としての機能を有しています。以下、抜粋。

滑走路を中心に南西側（福生市域側）が管理区域であり、東側（武蔵村山市域側）及び北西側（羽村市域側）が住宅地区を有する飛行場です。

昭和 15 年

旧日本陸軍の多摩飛行場として設置されたことからはじまり、終戦により昭和 20 年 9 月 6 日に米軍の進 駐が行われ接収された。(接収当時の滑走路:約 1,300m)

昭和 21 年 8 月 15 日

厚木に進駐していた第 3 爆撃飛行大隊(A-26 後に B-26)が進駐してきた。なお、この日をもって 公式に基地が開設され、当時の村山町(現在の武蔵村山市)の字名である「横田」をとって横田飛行場(基地)と称されることとなった。

朝鮮戦争 (昭和 26 年から 28 年)

基地は数次による拡張があり、さらに昭和 30 年に滑走路及びオーバーラン延長が決定され、北側に拡張 用地及び航空障害物制限区域等約 50 万平方メートルが提供されて、昭和 35 年には面積約 700 万平方メートル、滑走路 3,350m のほぼ現在の規模となった。

石碑に記された殉職者の経歴

（秋元書房「陸軍士官学校」の「第７部、出身者一覧」より抜粋）

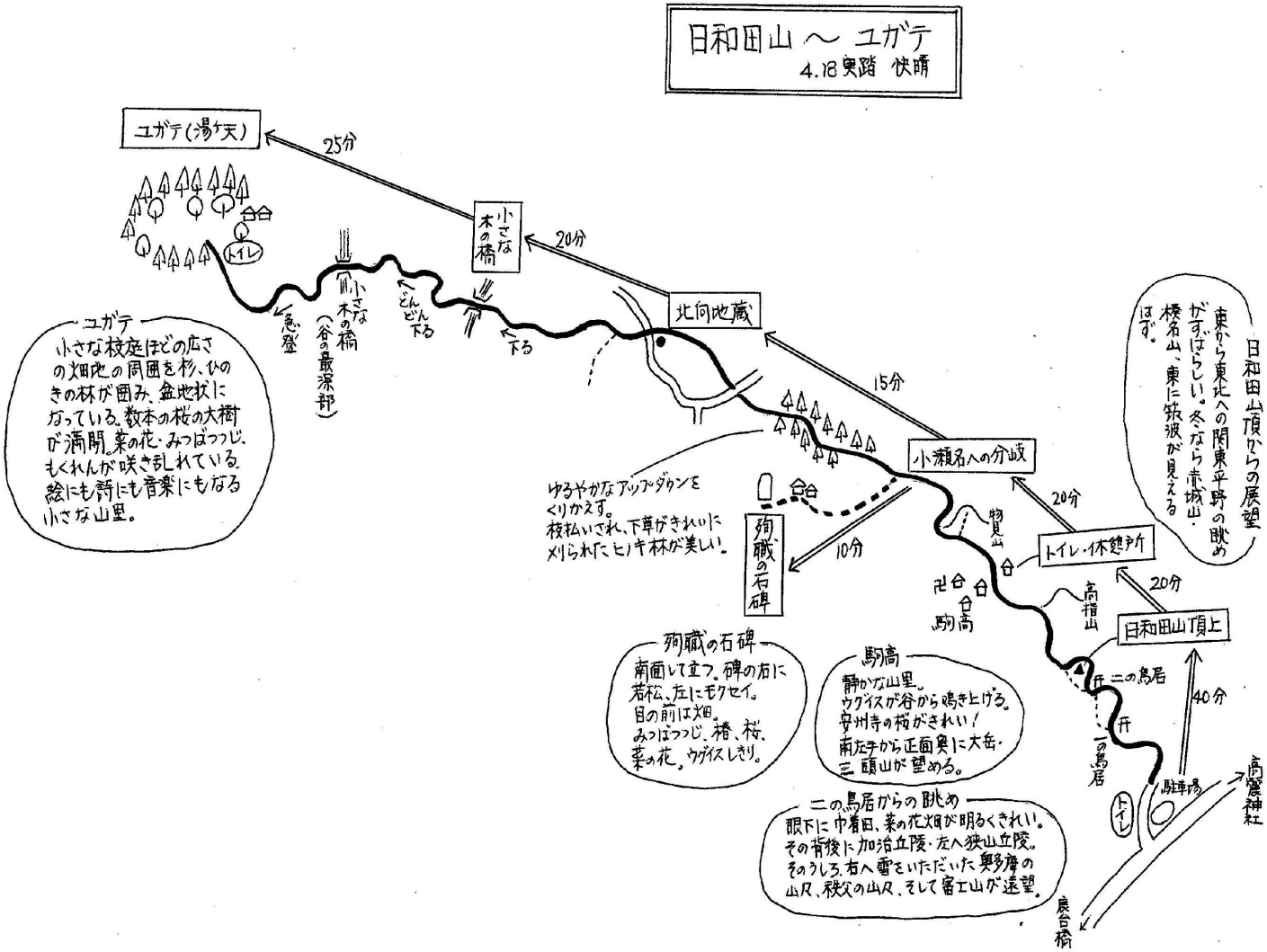
永野　淳　航士５６期卒、昭和１８年５月２６日卒業生計６２７名。同姓は永野博一。

川辺貞雄　航士 57 期卒、昭和１９年３月１９日卒業生計６４５名。同姓は川辺治人、川辺竜一。

山下豊　航士５７期卒、同姓は山下明、山下弘、山下一二三、山下赳夫、山下鉄雄、山下貴、山下智央、山下三郎、山下博晋、山下正巳（片 岡）、山下球太郎、山下正。

『日高町歴史散歩　第二集』（日高町教育委員会　平成元年二月発行）によれば、碑文に彫られたのは計器飛行訓練中に計器の故障で、付近の松の木に接触して殉職した方々であり、永野淳氏は北海道出身の教官、川邊貞雄氏は鹿児島県出身、山下豊氏は東京都小金井市出身、菅谷照氏は不明となっています。

｛メモ｝


日和田山 ～ ユガテ
4.18 奥踏 快晴
ユガテ(湯ヶ天)
25分
トイレ
小さな木の橋
20分
小さな木の橋
(谷の最深部)
急登
どんどん下る
下る
北向地蔵
15分
小瀬名への分岐
20分
トイレ・休憩所
20分
日和田山頂上
40分
ユガテ
小さな枝庭ほどの広さの畑地の周囲を杉、ひのきの林が囲み、盆地状になっている。数本の桜の大樹が満開。菜の花・みつばつつじ、もくれんが咲き乱れている。絵にも詩にも音楽にもなる小さな山里。
ゆるやかなアップ・ダウンをくりかえす。
枝払いされ、下草がきれいにメリハリされたヒノキ林が美しい。
殉職の石碑
10分
物見山
高指山
駒高
日和田山頂からの展望
東から東北への関東平野の眺めがすばらしい。冬、なら赤城山・榛名山、東に筑波が見えるはず。
殉職の石碑
南面して立つ。碑の右に若松、左にモクセイ。
目の前は畑。
みつばつつじ、椿、桜、菜の花。ウグイスしきり。
駒高
静かな山里。
ウグイスが谷から鳴き上げる。
安州寺の桜がきれい！
南左手から正面奥に大岳・三頭山が望める。
二の鳥居
一の鳥居
二の鳥居からの眺め
眼下に中着田、菜の花畑が明るくきれい。
その背後に加治丘陵・左へ狭山丘陵。
そのうしろ、右へ雪をいただいた奥多摩の山々、秩父の山々、そして富士山が遠望。
駐車場
トイレ
高麗神社
高麗橋